

茶の湯文化学会会報 No.14

第14号 / 1997年 7月25日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

二十一世紀の茶

倉澤 行洋

二十世紀が終わろうとしています。そこで皆さんにおたずねします。次の二十一世紀はどんな世紀になるとお考えですか。そしてお茶はどうなるのでしょうか。またどうなるべきなのでしょう。

私の少年時代、私の家の居間の壁に大きな世界地図が貼ってありました。それは国別に色分けされていました。一九四〇年頃の地図です。それから半世紀を経て、やはり国別に色分けされた新しい地図を見て、その違いに深い感慨を覚えます。古い地図では、アジアやアフリカのかなり多くの部分が、欧米のいくつかの国と同じ色に塗られていました。つまり植民地だったので。新しい地図では、それらのほとんどが独自の色に変っています。それは何を物語っているのでしょうか。歴史を遡って考えてみましょう。

利休や紹鷗が活躍する少し前のころから、世界の情勢に大きな変化が起こり始めました。コロンブスのアメリカ大陸への到達や、ザビエルの日本渡来などを思い浮かべるとわかるように、世界の諸地域間の交渉が急速に活発になり、その結果、それまで分立していた諸地域が一つの世界へと動き始めたのです。そしてその動きを主導したのは西洋でした。アジアやアフリカ

の多くの地域が欧米の国と同じ色に塗られるようになるのは、そういう動きによるものでした。西洋の主導による一つの世界への動きは、政治や経済の上ばかりでなく文化の上にも起こりました。西洋文化は、いつでもどこでも通用する「普遍」文化、その他の地域の文化はある限られた時代と場所でしか通用しない「特殊」文化と見られました。「特殊」は「普遍」によって駆逐されなければならぬ——こうして、文化の面でも西洋以外の諸地域は西洋の色に染まっていきました。ところが二十世紀になって、一つの普遍的な世界への動きに歯止めがかかりました。アジアやアフリカの諸地域が独立性独自性を取り戻してきたのです。地図の色も再び塗り変えられるようになりました。文化の面でも、西洋のみが普遍で他は特殊という見方は後退し、西洋も他と同じ特殊とみられるようになってきました。こうして一つの普遍的な世界への動きに代わって、特殊と特殊が対する相対的な世界への動きが強くなってきたのです。

この動きが二十一世紀に継続されるのは間違いないでしょう。そういう世界史の動きから見て確実なのは、新しい世界では、東洋が、これまでより遥かに重い役

割を担うようになるということです。それは理屈抜きで誰もが予感していることでもあります。

二十一世紀がどんな方向に動くか、それが大体わかったところで、あらためておたずねします。二十一世紀、お茶はどうなるのか、またどうなるべきであるのか、と。これについての皆さんの考えをお聞かせ下さい(会報編集部あて)。以下に、皆さんが考えになるるときヒントになりそうなことを箇条書きしておきます。

(一) 東洋に生まれ育ったいろいろな文化の中で、茶文化ほど広い受用者を持ち、かつ深く豊かな内容をもつ文化は、他に類例がありません。特に、八世紀に陸羽らによって基礎が作られ、十六世紀に紹興、利休らによって大成され、今日に受け継がれている「茶道」は、広く豊かな文化的表現と深遠な哲理とを兼ねそなえた、東洋文化の精華です。東洋が重みを増してくる二十一世紀に、東洋文化の精華である茶道は当然重味を増すし、またそうならないければならないでありましょう。

(二) 数百年にわたる西洋主導の時代(近世・近代とよばれる)を支えた原理はヒューマニズム(人間本位主義)でした。ここにいうヒュー

平成九年度総会報告

平成九年度の総会は、六月七日(土)午前十時半より、京都市左京区の京大大会館で行われ、以下に報告するよう順にしたがって進められた。約百五十名の参加を得ての開催であった。

まず戸田勝久氏の司会によって始められ、中村昌生会長の挨拶に続いて総会の議長選出が行われた。議長には島崎丞氏(石川県立美術館館長)、副議長には倉澤行洋氏(副会長)が選出されて議事に入った。

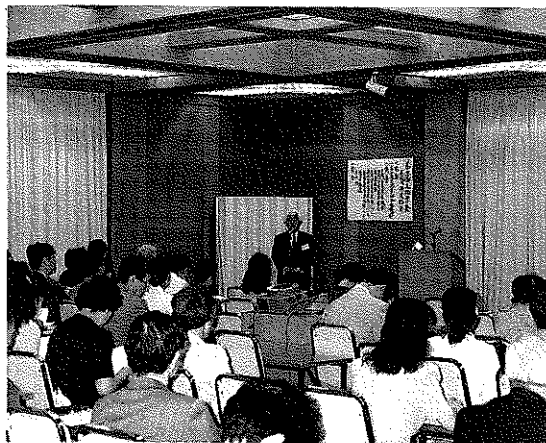
議題の最初は谷見氏(理事)による平成八年度の事業報告である。総会、大会、研究会などの各種催し、会報、学会誌の発行などについて概要が報告された。学会誌の発行については、近日中に発行予定できるとのことであった。続いて赤沼多佳氏(理事)より、これらの事業に関連して平成八年度の決算報告がなされ、これについての監査報告は、伊藤郁太郎監事より適正である旨の報告がなされた。これらに関する質疑はなく、そのまま承認された。

次に平成九年度事業案と予算案について、

マニズムとは、人間と自然万物とを対立するものと見なし、自然を支配し征服する力に人間の偉大さがあると考える立場です。これに対して東洋では、人間は大自然の一部で、人間と自然万物は根本では同じものであり、大自然と一如に生きるのが人間のよき生き方であると考えてきました。そういう立場をナチュラルリズム(自然本位主義)と呼ぶことにしますと、次の時代(後近代、ポストモダンエイジとよばれる)には、ナチュラルリズムがあらゆる面で強まってくるでしょう。こんにち盛んになってきているエコロジーや自然との共生の運動、科学におけるニューサイエンスの主張などはそれにつながるものです。そして茶文化はナチュラルリズム文化の代表的なものです。ナチュラルリズムの進展につれて、茶文化はますます注目されるようになるでしょう。

(三) こういうふうにごく考えてみますと、茶文化は、なかんずく茶道は、伝統文化という言葉でふつう考えられているような過去の文化であるばかりではなく、次の時代にますます輝きを増す将来の文化でもあります。またそういう文化になるよう、茶文化の内的充実と発展につとめることは、われわれ茶文化に関与する者の責務でもありましょう。

それぞれ谷、赤沼両氏より提示され、いずれも満場一致で了承された。平成九年度の大会は、十一月二十三日(日)ホリデイ・イン京都での開催が決定し、また研究会は、第七回が九月六日(土)石川県立美術館で、第八回が二月二十一日(土)東京の五島美術館で開かれる。例会は、近畿、東京とも、本報別項のように決定した。



今回、総会としては初めて提案された議題に「会誌原稿審査規程」がある。まず中村二柄氏より、この提案に至るまでの経緯と案の要点が述べられた。すなわち、原案は倉澤行洋、

平成九年度第一回理事会報告

平成九年五月十日(土)、午後四時より京都市左京区の生産開発科学研究所において平成九年度の第一回理事会が行われた。出席理事は十四名。中村昌生会長の挨拶の後、以下の議題について審議された。

- 一、平成八年度事業報告
- 二、平成八年度決算報告
- 三、平成九年度事業案

総会

大会

研究会

例会

会誌

- 四、平成九年度予算案
- 五、平成九年度役員
- 六、査読委員
- 七、その他

また、会務を補佐する幹事の追加が議され、これまでの神津朝夫、山田哲也、原田茂弘氏に加えて池田俊彦、美濃部仁の両氏が幹事として加わることになった。

村井康彦、中村二柄の三氏によって作成され、ここ二、三年来検討が加えられ、三回目の理事会で本案がまとまったとのことであった。

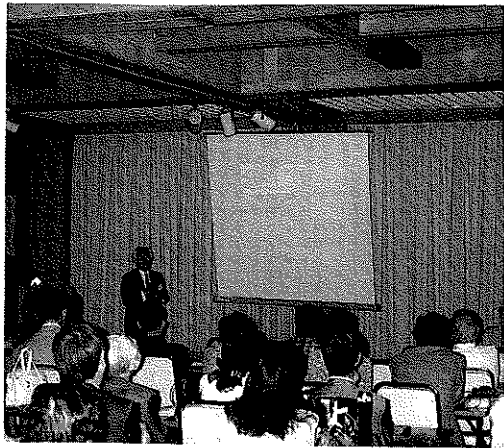
その際の眼目としては、第一に、本学会が学際的な学会で多分野にわたるため、「哲学・文学」「歴史」「美術(建築・庭園・工芸を含む)」「茶業(生産・流通・自然科学的研究を含む)」「実技」を学会の五本柱と考え、この五分野にしたがってそれぞれに査読委員を定めること、第二に、査読委員の氏名を公表すること、第三に、審査にあたっては、本学会が旨とする茶の湯の文化の継承と発展を目指しての創造的な立場を尊重する、との説明がなされ、戸田勝久氏(理事)により規程案の全文が朗読紹介された。また、併せて「会誌編集委員会規程案」も提案され、いずれもとくに異議はなく、原案どおり承認された。(規程及び査読委員氏名は後掲)

最後に役員改選の件が計られ、倉澤行洋氏より新役員候補が提示され、原案どおり承認された。決定した新役員は以下のとおりである。(敬称略・五十音順)

- 【会 長】 中村昌生
- 【副会長】 倉澤行洋・林屋晴三・村井康彦
- 【理事】 赤沼多佳・尼崎博正・影山純夫・

木下政雄・熊倉功夫・小泊重洋・高橋忠彦・高橋康夫・竹内順一・武田恒夫・谷 晃・谷端昭夫・筒井紘一・徳川義宣・戸田勝久・中村利則・橋崎彰一・西 和夫・橋本 実・久田宗也・日向 進・堀 信雄・三崎義泉・吉村元雄・ホルスト・ジークフリート・ヘンネマン

【監事】赤井達郎・伊藤郁太郎
理事の伊藤延男、稲垣栄三、中村二柄の各氏が退任され、かわって小泊重洋（静岡茶業研究所）、中村利則（文化環境計画研究所）、ホルスト・ヘンネマン（沖縄県立芸術大学）の各氏が新任された。



附 本規定は平成九年六月八日から施行する。

これにともなって、以下の各氏が査読委員として委嘱された（五十音順・敬称略）

「哲学・文学」分野

影山純夫・中村二柄
堀 信夫・三崎義泉
森川 昭

「歴史」分野

川嶋将生・筒井紘一
角山 栄・布日潮風

「美術」分野

尼崎博正・伊藤延男
武田恒夫・林屋晴三

「茶業」分野

小泊重洋・寺田孝重
橋本 実・林屋慶三
若原英武

「実技」分野

小川後楽・小堀宗慶
田中仙翁・戸田勝久
久田宗也

また、総会で承認された「会誌編集委員会規程」は左の通りです。

一、 会誌『茶の湯分文化学』の編集は、五名の編集委員によって構成される編集委員会がおこなう。

二、 編集委員は理事会の推薦により理事中

最後に、再び戸田勝久氏の宣言によって総会は閉会した。総会終了後、同会場では、午後に予定されていた見学先のスライド説明が中村昌生氏によって行われ、午後十二時半に終了した。

総会で承認された「会誌原稿審査規程」は左の通りです。

一、 会誌『茶の湯分文化学』に掲載する論文原稿は、原則としてこの規程による審査を経る。

二、 会長は理事会の推薦により「哲学・文学」「歴史」「美術（建築・庭園・工芸を含む）」「茶業（生産・流通・自然科学的研究を含む）」「実技」の五分野より各五名ずつ、計二十五名の査読委員を任命し、その氏名を公表する。

査読委員の任期は二年とする。再任をさまたげない。

三、 編集委員会は原稿ごとに、当該分野および関連分野より三名の査読委員に査読を委嘱する。

必要に応じ、会長の承認を得て、原稿ごとに査読委員以外の研究者一名を査読者に加えることができる。

原稿ごとの査読者の氏名は公表しない。

より会長が任命し、その氏名を公表する。

三、 編集委員の任期は二年とする。再任を妨げないが、三期を超えぬものとする。

四、 編集委員は査読委員を兼ねない。

附 本規定は平成九年六月八日から施行する。これにともなう理事の分担任は以下の通り。

理事役割分担任

会 務 担 当 林屋 晴三・赤沼 多佳

会 誌 担 当 熊倉 功夫

（編集委員） 村井 康彦・倉澤 行洋
熊倉 功夫・谷 晃

会 報 担 当

中村 昌生・谷端 昭夫
中村 利則・影山 純夫

大会研究会担当

倉澤 行洋・筒井 紘一
谷 晃・谷端 昭夫
赤沼 多佳・影山 純夫
戸田 勝久・高橋 忠彦
竹内 順一

本年度総会に付帯する事業として、大徳寺山内の塔頭、孤蓬庵・聚光院・真珠庵にある茶室の見学会が催された。



見学会には多数の方が参加を希望されたが、

四、 審査の公正を期するため、原則として原稿執筆者と同じ研究室・講座・部課等に属する研究者は、その原稿の査読者にならない。

五、 査読者は審査基準（新知見の有無、論述内容の妥当性、論述形式の妥当性等）に照らして原稿を査読し、その結果を文書により編集委員会に報告する。

六、 編集委員会は査読の報告に基き原稿の採否等を判定し、その結果および理由を当該原稿の査読者と執筆者に通知する。

七、 編集委員会が「再査読」と判定した場合、執筆者は原稿を修正し、それを編集委員会に提出する。

修正された原稿は同じ査読者の査読を受ける。

八、 編集委員会が「不採用」と判定し執筆者がそれを不当と認めた場合、執筆者は理事会に、不当とする理由を記した文書を提出して再審査を請求することができる。

理事会はその請求を妥当と認めた場合、他の査読者に査読を委嘱し採否について再審査する。

再審査のための理事会には編集委員および初めの査読者は参加しない。

諸般の事情により止むをえず参加者数を制限することになり、多くの方にご迷惑をおかけした。しかし、それでも一般公開されていない茶室であったためか、九十五名ほどの参加者があり、盛会となった。

総会終了後、中村会長より孤蓬庵の忘筌・直入軒・山雲床、聚光院の閑隠席・榊床席、真珠庵の庭玉軒の、各茶室それぞれの見所・特徴について、スライド映像による懇切な解説を受けた後、昼食もそこそこに大徳寺へ向かった。



大徳寺では谷理事より見学に際しての留意

例会のご案内

点の説明があった後、参加者全員が三班に分かれ、事前配布の見学会資料を持って、孤篷庵・聚光院・真珠庵へとそれぞれ移動した。孤篷庵では中村会長自ら解説役をかって出られ、忘筌の成立、山雲床と龍光院密庵席の關係などについて詳しい説明があった。

聚光院では中村利則理事より、まず禅院の方丈の構造についての説明をうけ、本院が創建当初の趣を残す貴重な遺構であることを知らされた。引き続き閑隠席・柵床席に移動し、各室の解説をうけた。

真珠庵では池田俊彦幹事より、真珠庵の成立と建造物についての説明をうけた後、宗和好みの茶室庭玉軒を見学し、ここでも詳しい解説をうけた。

なお、各見学先では解説者の先生方に参加者より様々な質問が寄せられたが、どなたも真摯に受け答えされ、好評であった。

一時半から四時すぎまで、梅雨とは思えぬ好天のもと、大徳寺山内の名席をめぐり、茶室史の専門家による解説を受け、有意義な半日を過ごすことができた見学会となった。

いろいろご無理をお願いしたにも関わらず、快く見学をお引き受けいただきました、関係各寺院には心より御礼申し上げます。

東京例会

昨年度に引き続き、以下の日程で午後二時より東京学芸大学(小金井)の講義棟S二〇六を会場として行われる予定です。参加は自由です。ふるってご参加ください。

一、八月三十日(土)

「松花堂の消息を読む」 矢崎 格氏

二、九月二十日(土)

「宗久・宗易道具書立について」 高橋あけみ氏

三、十月二十五日(土)

「イギリスの喫茶文化」 滝口 明子氏

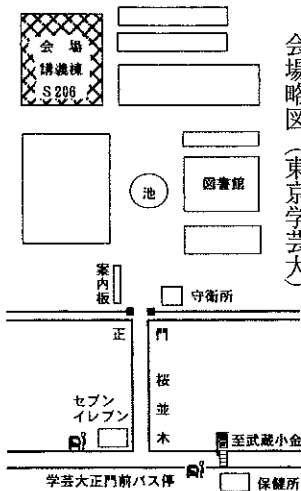
四、十一月二十九日(土)

「栄西以前の茶の湯」 中村 修也氏

五、平成十年三月二十八日(土)

報告者 未定

会場略図(東京学芸大)



近畿例会 近畿例会は、これまで同様に京大会館を会場として以下の通り行われます。参加は自由です。会員の方のご来聴を歓迎します。

一、八月二十二日(金) 午後六時三十分より

シンポジウム「茶の湯と宗教」

三崎 義泉氏(天台本覚論の面から)

今泉 元司氏(禅の面から)

影山 純夫氏(神道の面から)

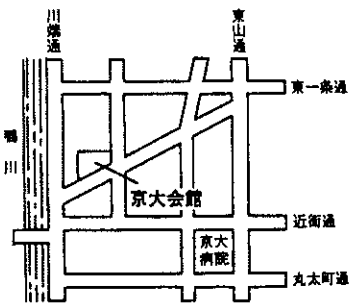
(司会) 倉澤行洋氏

※なお、第二回例会は平成十年三月六日(金)

午後六時三十分よりシンポジウム「茶の湯と自然」と題して実施の予定です。詳細は

会報でご案内します。

会場略図(京大会館)



京大会館

〒606 京都市左京区吉田河原町15-9
TEL (075) 751-8311(代)
FAX (075) 761-5403

東京例会報告

平成八年度最後の東京例会が平成九年三月二十二日、東京学芸大学でおこなわれました。要旨は次の通り。

「茶道具の名物とは何か」

竹内 順一

参加者は約四五名。一、考察するための手段、二、名物道具の成立過程の想定、三、変わり行く規範、四、「山上宗二記」の茶入に見る名物観、五、「名物にならなかつた茶入」という項目でスライド映写を交え行った。

「名物」を考える手段としては、まず現存する茶道具がある。第二に名物記で、桃山時代には、天正十六年(一五八八)に成立した「山上宗二記」がある。第三には、茶会記がある。とりわけ「道具拝見記」は、茶道具の評価として貴重である。

佐び茶が盛んになるとともに成立した名物茶道具は、遠く中国から輸入したものであり、請来唐物が主体であった。しかも今日の美術史学の年代観からそれをみれば、桃山時代当時すでに三百年以上も時を経た、場合によっては四百五十年も前の骨董品であったこと

ある。しかもその請来唐物は、日本の茶人のための茶道具として製作されたものではなく、まったく別の目的の美術品あるいは実用品であった。つまり茶道具になるまでに何らかの

「長期の伝存」の状態があり、あらためて茶道具として「選択・選別」されるという過程があったことを想定せざるを得ない。とすれば当然ながら、茶道具として成立するための「選択・選別」には、ある種の「規範」が存在したであろう。このことを考えることが名物道具を探る上で大切であり、同時に、逆に「名物にならなかつた」茶道具もあつたはずであり、このことも併せて問題にせねばならない。

茶道具は、時代によって評価が変遷する。掲出する名物の数量の変化も、価値の変遷を示す。たとえば「山上宗二記」は、唐物の茶入を四十四点挙げていて、七十余年後の万治三年(一六六〇年)に編纂された『玩貨名物記』は、唐物を百二十一点、和物(瀬戸)を十一

点挙げる。新しい名物観によって新たに国産の茶入である瀬戸茶入が注目され、これが増加するのは自然だが、唐物茶入が三倍にも達するというのは増加ぶり、という説明がつかのらうか。唐物茶入が増加したのは、桃山時代の「規範」とは別のものがあつたことを

思わせる。ちなみに江戸時代後期の松平不昧の『古今名物類聚』(一七八七年)では、唐物(一部島物を含む)茶入が百二十点、和物茶入が二百三十二点とさらに増え、高橋帯庵の『大正名器鑑』(一九二二年)では唐物(一部島物を含む)茶入が百四十五点、和物は二百九十点と、時代が下がるにしたがって増加する。「甘くなつた規範」とでもいわざるをえない変化である。すくなくとも桃山時代の「規範」は失われていったのである。

茶の湯文化学会は、海外の学会とも機関紙の交換などを通して交流を行っておりますが、左記の学会から送られた刊行物を事務局に常備して、会員の皆様に関連していただきたいと思っております。借覧ご希望の方は事務局までお申し出下さい。(但し、送料等は借利用者においてご負担願います)

一、「陸羽茶文化研究」(第一期から五期)

(湖州陸羽茶文化研究会)

二、「中国茶文化」

(一九九四/四期・一九九五/二期)

(中国江西省社会科学学院歴史研究所)

三、「韓国茶学会誌」(第一巻・二巻)

(韓国茶学会)

次の例会のご案内

東京例会

八月三十日(土) 午後二時～五時

場所 東京学芸大学

テーマ 「松花堂昭乗の消息を読む」

発表者 矢崎 格氏

近畿例会

八月二十二日(金) 午後六時半～九時

場所 京大会館

テーマ 「茶の湯と宗教」

発表者 三崎 義泉氏

(天台本覚論の面から)

今泉 元司氏(禅の面から)

影山 純夫氏(神道の面から)

司会 倉澤 行洋氏

※近畿・東京例会のご案内は会報でのご連絡のみですのでご注意ください。

発表者の募集

大会・研究会の発表者を募集しています。

平成九年度大会は十一月二十三日(日)に京都で、第八回の研究会は平成十年二月二十一日(土)に東京の五島美術館で行われる予定です。大会は一報告につき、報告二十分、質疑応答十分。研究会は報告六十分、質疑三十分程度です。

発表を希望される方がありましたら、事務局までご連絡下さい。ご連絡に際しては、大会・研究会の三カ月ほど前までに、八百字程度の梗概を大会、研究会応募の別を明記して事務局までお送り下さい。

*会報への投稿を募集しています。茶の湯文化に関するものであれば内容は問いません。千字程度の原稿と(写真を添える場合は二枚まで)を事務局会報係までお送り下さい。掲載・体裁などについては事務局にご一任ください。

研究会のご案内

総会でもお知らせいたしましたように、第七回(平成九年度第一回)の研究会を、金沢市の石川県立美術館で開催いたします。金沢では、はじめての研究会となります。会員の

皆様のふるってのご参加をお待ちしています。研究会につきましては、別途、会員の皆様にはご案内いたしますが、内容は左の通りです。

日時 平成九年九月六日(土)

午後一時三十分より

※会場の都合で、総会時にご連絡いたしました日から変更になっておりますので、ご注意ください。

場所 石川県立美術館

金沢市出羽町二一

電話〇七六二(三二) 七五八〇

報告 一、北 春千代氏(石川県立美術館)

「重文・百工比照の金具類に見る

小松葭島書院の遠州好み」

二、池田 俊彦氏(福井工業大学)

「加賀の茶室」

参加費 会員五百円・非会員 千円

(当日、受付でいただきます)

*九月五・六・七日の三日間に限り、研究会案内封筒の呈示により「石川県立美術館」、「中村記念館」、「大樋美術館」の三館が割引きで入館できます。お時間のある方はお立ち寄り下さい。